

聖母被昇天修道会による明の星学園における 教育の理念と実際

斉藤 恵子

キーワード： カナダ、カトリック修道会、女子教育

はじめに

かつて、私は共立女子大学に在職して、共立女子大学総合文化研究所の地域研究部門の学際的研究プロジェクト「文化のかたちを探る」の一環として、「多民族社会における文化状況の比較研究—ヨーロッパ及び北アメリカを中心に」というテーマの共同研究に、1994年度から1996年度にかけての三年間、たずさわった。

このプロジェクトは、それに先立っての共同研究「カナダの多言語多文化状況—女性の視点から」を土台として、それを発展させるものであった。この共同研究では、専門分野や研究領域を異にする教員たちが、カナダには共通して関わりをもっていた。その後のプロジェクトでは、比較研究の関心がカナダ以外の北アメリカやヨーロッパにも広がっていった。

私自身の関心は、初めから「女子教育を通してみた日本・カナダ関係」を跡づけることにあった。その関心を持続させて、1998年6月出版の共立女子大学総合文化研究所年報第四号別冊に、「女子教育を通してみた日本・カナダ関係」—カトリック修道会の宣教活動とその歴史的背景—という小論文として発表した。

その論考で、日本の女子教育に貢献したカトリックの修道会¹⁾として、コングレガシオン・ド・ノートルダム、聖ウルスラ会、ケベック・カリタス修道女会、及び聖母被昇天修道会を取り上げた。すべて、カナダのケベック州に本拠をもつカトリックの修道会である。

そのうち、コングレガシオン・ド・ノートルダムの建てた桜の聖母短期大学(福島市)と、聖ウルスラ会の高校を、仙台と青森県八戸に訪問して、先生方にインタビューをさせていただき、具体的に教育の現場をみせていただいたが、後の二つの修道会の学校については、訪問できないままに終わっていた。

今回、青山学院女子短期大学総合文化研究所の共同研究「キリスト教女子高等教育機関の理念と実際」の一員に加えていただいた。この共同研究の目的は、明治以降、欧米のキリスト教宣教師たちによって開かれた女子のための高等教育機関の教育が、キリスト教主義に基づかない学校と比較して、どのような特色をもっているか、主として外国語、音楽、宗教、生活の四つの側面での具体的なカリキュラムや指導方法に照明をあてて明らかにすることにある。その研究対象として考察するには、カナダのケベック州ニコレット市に本部をもつ聖母被昇天修道会に

よる明の星学園がふさわしいのではないかと思う。

明治以降に日本に伝えられたキリスト教は、主として、アングロ・サクソン系のプロテスタントであった。従って、キリスト教主義の教育機関も、欧米の宣教師によって設立されたプロテスタントのミッションスクールが主流であった。近代化への道を急いだ明治日本は、国家を整備するのに、多くアメリカ、イギリス、それにドイツを模範としたが、カトリック教会は旧徳川幕府を支援したフランスとのつながりが強かった。パリ外国宣教会をはじめ、サン・モール会やシャルトルの聖パウロ会などが教育と社会事業に従事し、明治時代には主に、初等教育を充実させた。

大正期には、「大正デモクラシー」と呼ばれる時代的雰囲気の中でカトリック教会にも新しい局面が開かれて、初等教育から高等教育へと進出した。日本に対する布教、宣教活動にはフランスだけでなくカナダも加わった。ちなみに日本に最初に定住したカナダの修道女は1898年(明治三十一年)に来日したエレヌ・パラディである。

カナダのプロテスタント婦人宣教師の活動としては、1884年、カナダ・メソヂスト教会のマルタ・J・カートメルによる東洋英和女子校の開設、キャロライン・マクドナルドとエマ・カウフマンによるYWCAの設立が有名である。カナダのメソヂスト教会は、アメリカのミッションと共に、東京女子大学の創設にも加わった²⁾。

カナダのカトリックの女子修道会も、昭和になって、日本の女子教育にたずさわり始め、地味ながら今日に至るまで、着実な成果をおさめているが、プロテスタント系の学校ほど世に知られていない。それはまことに残念なことである。ここに聖母被昇天修道会による明の星学園の例を通して、キリスト教に基く教育がどのように実践されてきたかを明らかにしたい。

カナダからのからし種

1987年に創立五十周年を迎えた明の星学園の五十年史に、その当時の学園理事長アンリエット・カンティン女史は、「五人のカナダ人修道女によって日本の地に蒔かれた種は、多くの人々の支えによって、聖書のからし種のたとえ話のように、どんどん伸びて、そのかげに空の鳥が宿るほど大きな枝を張りました。」と書いている。

「からし種のたとえ話のように」とは、まことに含蓄の深い言葉である。このたとえ話は、マルコによる福音書の4章30—32節にある。そこでイエスは次のように語っている。「天の国は一粒のからし種に似ている。ある人がそれを取って畑にまいた。それは種のうちで、一番小さいものであるが、成長したときは、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来てその枝に巣をつくるほどの木になる。」

1934年にカナダから五人の修道女が来日して、1937年からは、青森技芸学院として、ささやかな女子教育への第一歩を踏み出した明の星学園は、今では、青森に青森明の星短期大学と専攻科、青森明の星高等学校、付属幼稚園、付属音楽教育研究所、弘前に弘前明の星幼稚園、浦和の大牧に明の星女子短期大学、浦和明の星女子高等学校、浦和明の星幼稚園を擁するほどに

成長した。

明の星学園は、開校以来、キリスト教的ヒューマニズムを通しての教育を目指し、不透明で多様な価値観が渦巻く現代社会に、信念を持って生きる人間の育成を目標としている。校名の「明の星」は、理想と仰ぐ聖母マリアの呼称からとっている。

昭和期以降、日本の女子教育事業にたずさわったカナダのカトリック女子修道会は、コングレガシオン・ド・ノートルダム、聖ウルスラ会(カナダ修族)³⁾、ケベック・カリタス修道女会、聖母被昇天修道会など、すべて、カナダのケベック州に本拠をもっている。1853年にケベック州ニコレット市に設立された聖母被昇天修道会を除いて、あとの三つは、カナダがまだフランスの植民地として、新フランス(Nouvelle France)とよばれていた時代に創立されたものである。

この時代は、ルター等による宗教改革以後の、カトリック教会側の反宗教改革が進行していて、新たな使命感に裏打ちされた布教への情熱が高揚していた。カトリック教会の宗教的神秘主義の一面と、精力的な実行力とが結びついて、神学校、看護院、学校の創設となってあらわれた。こうした教会人のエネルギーは、カナダのような土地では、「神の愛を知らない」先住民への熱心な布教活動となってもあらわれた。先住民に対するキリスト教の布教宣教活動には、今日からみれば様々な面で、否定的な側面、反省すべき要素があるのは確かであろう。

しかし、コングレガシオン・ド・ノートルダムの創立者マルグリッド・ブールジョワ(1620～1700)、聖ウルスラ会(カナダ修族)の創立者マリー・ド・レンカルナシオン(1599～1672、御託身のマリアという修道名。本名はマリー・ギュイヤール)とケベック・カリタス修道女会の創立者マルグリット・デュビル(1701～1771)は、それぞれ、その時代のカトリック教会の信仰のエッセンスを体現したかの感がある。彼女達は自分の生まれた時代の枠の中で、それぞれが全力を尽くして自分の信ずるものに自己を捧げきって生きた。様々な批判は後代にまかせよう。

この三人の創立者達は、みな神秘体験と強烈な召命意識、使命感をもっており、彼女達の強いカリスマが、現在に至るまで、その精神を受け継いでいる教育事業の活動の源となっている。彼女達の生涯は、様々な資料によって、私達に明らかにされている。

それに反して、カナダのケベック州ニコレットに本部をもち、現在、世界の100以上の場所で教育活動をしている聖母被昇天会の創立者は、当時ケベック州セン・グレゴワール教区の主任司祭であったジャン・ハーパー神父(1802～1869)であるが、その生涯については、ほとんど知られていない。ハーパー神父が、自分の家庭での経験から、将来母親となる女性の教育がいかに大切であるかを痛感し、女子教育によって人間の素養を可能な限り伸ばしたいと思った。そのハーパー師の熱意に賛同して、女子教育に生涯を捧げる決心をした四人の女性たちがいた。当時セン・グレゴワールには、村の若い娘の教育を託すには、コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会に頼むより他なかった。そこで、ジャン・ハーパー神父は、この地に修道会を創立して、教育修道女を養成する必要性を痛感して、四人の女性たちと共に修道会を始めたことが確実なこととして知られているだけである⁴⁾。

その後、会憲が整備され、修道会は認可された。八月十五日の聖母被昇天⁵⁾の祭日に、教会

法による修練期が始まった。「聖母被昇天修道会」という名は、この祭日を記念して名付けられたものである。

聖母被昇天会が日本の青森と浦和に建てている学校は、「明の星」学園と呼ばれる。「明の星」とは聖母マリアの別名⁶⁾で、学園で学ぶ女性達が、「全ての女性の中で最も祝福された方」である聖母マリアを理想の女性として仰ぐようにとの願いがこめられている。その願いは、女子教育によって人間の靈的素養を出来る限り伸ばしたいと望んだ創立者ジャン・ハーパー神父の思いともつながっている。「マリアはキリストへ導く星である。マリアとの出会いは必ずキリストへの出会いにまで至る」という教皇パウロ六世の言葉とも照応するものである。

教育修道会である聖母被昇天会のモットーは「行け、万民に教えよ」である。これは「全世界に行って、すべての人に福音を宣べ伝えなさい。」(マルコによる福音書16-15)と「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にせよ。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイによる福音書18-20)に由来するものである。

聖母被昇天修道会の紋章には、「行け、万民に教えよ」*Euntes ergo docete omnes gentes*と、「星を仰ぎ、マリアに願え」*Respice Stellam Voca Mariam*という二つのモットーが刻まれている。マリアによって祈るロザリオ、四海の民への教育による光を象徴する松明、マリアを表す星と、十字架が組み合わされたデザインとなっている。

明の星学園の紋章は、この学園がキリスト教を教育の目的としているしとして、十字架によって四つに分けられた楕の形をしている。星は、学園が保護者として仰いでいる聖母マリアを表す。燈火は、この学園で受けた教育が、その後の人間形成と人生の旅路において道を照らす光となることを意味する。桜は日本人が深く愛する花であり、学園生が日本の文化を大切にしようとする願いがこめられ、楓は、創立者の国カナダの国旗からとられている。

桜の花といえば、同じくカナダの女子修道会コングレガシオン・ド・ノートルダムが1932年に福島を宣教地として根をおろし、1946年に幼稚園から始まり、1955年に短期大学を創立した時に、やはり「桜の聖母」という名が選ばれた。日本のシンボルである桜と女性の理想としての聖母を組み合わせたもので、命名者は仙台教区の司教であった。桜の聖母の学校案内には、「この名前には、日本でキリスト教教育を行なうにあたって、ヨーロッパ文化の押しつけではなく、日本のアイデンティティを確立したキリスト教教育でありたいという願いがこめられています」と記されている。

1853年にケベック州セン・グレゴワールで始められた聖母被昇天修道会の会憲38条に、「本会は教会の呼びかけに特別な注意を払い、文化を異にする国民がそれぞれ自国の文化の中でイエズス・キリストを見出せるよう助ける」とある。この会は、1930年の初めには、二千人もの会員を有し、海外宣教への呼びかけに応えようとしていた。教皇ベネディクトゥス十五世(1914~1922在位)と教皇ピウス十一世(1922~1939在位)は、特に海外宣教に熱心であった。とりわけ「アジアに福音を」ということが考えられていた。

カナダ国外にも、宣教地を拡大したいと思い始めていたドミニコ会カナダ管区長のエミール・ラングレ神父は、1930年にモントリオールのコングレガシオン・ド・ノートルダム本部を訪問して、コングレガシオンの修道女を日本に派遣するよう要請した。それに先立って、ラングレ神父は、日本を訪れ、宣教活動の準備として視察をしている。日本への宣教は、特に女子修道会の協力の必要を感じた。コングレガシオンは前述の通り、福島に根拠地を置いた。

ラングレ神父はニコレットの聖母被昇天修道会にも、教育事業にあたるため、日本へ五人の修道女を派遣するよう要請した。当時の総長マリー・エウステルは、深い信仰と共に、広い視野と、果敢な行動力をもった女性であった。エウステル総長は、この要請にこたえようと望んだが、派遣するに相応の修道女を選び出すことの難かしさと、経済的な資金源の二つの点から、すぐさま実行することは困難であった。

ラングレ神父から、日本への教育事業設立のために二万ドルは必要だと言われていたが、当時のカナダは財政的危機に^{しほ}あった。しかし、深い信仰と共に女性起業家としての才能を備えていたエウステル総長は主がこの仕事を本当に望んでおられるなら、必ずその手段をお持ちであると固く信じていた。そこで総長は、毎年おこなわれる「宣教の日」を組織的に計画し、会の本部とすべての修道院、また学校に呼びかけたのである。

この計画は、驚くほどの反響をよび、その事業に必要な額の献金と、百三名の入会希望者をもたらした。1932年3月4日、函館教区の代理教区長ドミニコ会員デュマ神父は、ニコレットの聖母被昇天修道会に、日本での任地が、青森市と決まったことを知らせてきた。コングレガシオン・ド・ノートルダムが福島であり、今また東北の地青森が選ばれた理由の一つは、東北地方の気候がケベックによく似ていることであろう。また、冬が長く、厳しい自然条件と戦って人々が生活している、辺地ともいべき青森のような土地に、宣教の種が蒔かれるべきであるという強い信念に基くものでもあったと思われる。

青森「明の星」

青森への派遣が決まったのは、次の五人の修道女であった。よい声をもち、器用で優秀な看護婦であったシスター・ローズ。ピアノとヴァイオリンが得意で、生まれつきの調整者としての才能をもち、楽観的な性格のシスター・ジゼル・ドルイン。五人のうちただ一人のアメリカ人であるシスター・セン・ジャン・クリゾストム。彼女の母国語は英語であったが、フランス語も習得していた。アルバータ大学で教育免許状をとり、すでに経験ある教育修道女であったシスター・セン・フロリアン。すでにカナダで責任ある地位についていたシスター・セン・ゼノビー。

聖母被昇天修道会では、創立当時から現在に至るまで、芸術に特別な関心が払われてきており、音楽、絵画、陶芸、タピストリー、演劇やフランス語表現などが奨励されている。1935年10月、青森市浪打に根をおろした五人の修道女達は、最初は私塾の形で、本場のフランス語、英語、西洋料理、洋裁、手芸、ピアノ、ヴァイオリンなどを教え始めたが、十二月には、青森

県立青森高等女学校に千人の聴衆を集め、音楽の得意なシスター・ジゼル・ドルインを中心として、慈善音楽会を開いている。修道女達は、本格的な形で教育事業を始めたいと機会を待っていたところ、市内で洋裁学校を運営する、キリスト教信者の越後谷都哉子氏が学校を譲りたいと申し出た。その申し出を受け、1937年に、青森技芸学院として出発することができたのである。外国人が教育事業を始めるのは困難であったこの時代に、このような形で学校を始めることができたのは、修道女達にとって大きな喜びであった。

青森技芸学院は、発足当初、生徒三十名に対して、外国人教師六名、日本人教師二名という陣容であった。翌年には、学院付属幼稚園の開園許可も出た。

1941年、青森技芸学院は、青森高等技芸学院と名称を改めたが、戦争への気運が高まってきて外国人に対する警戒が厳しさを増し、修道女達は修道服で教壇に立つことは禁じられた。その年の12月に太平洋戦争が始まり、外国人修道女は、修道院に監禁される者、強制帰国になる者、仙台に他の修道会の修道女達と抑留される者と、それぞれに厳しい試練にさらされた。

青森に残された青森高等技芸学院と幼稚園は、札幌にあった藤学園を運営していた殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ会から派遣された五名の修道女と、聖母被昇天修道会に最後まで留まった日本人修道女二名によって守られたのであった。1944年には青森女子商業学校と校名を変更することになった。

1946年、戦争が終わり、修道女達が、抑留されていた仙台や、アメリカ、カナダから戻ってきて、生徒も八百名近くに増え、校名も青森明の星高等女学校と改められた。音楽の得意なシスター・ジゼル・ドルインを中心として、それを助ける日本人教師と共に、音楽の明の星という評判が高まってきた。ピアノ教室が開始され、それが発展して、現在の青森明の星短期大学付属音楽教育研究所となった。

まだ戦争の傷手が深く、当時の青森市には音楽会を開く会場はどこにもなかった1949年に、明の星学園の講堂で、「闇と光」と題されたクリスマスのオペレッタを上演。市民の好評を勝ち得て三日間続演された。このオペレッタの幻想的な美しさをもつ活人画や音楽は、食物も充分でなく、日々の生活に追われていた市民に、深い感銘を与えた。

また1952年には、世界的なピアニストであるアルフレッド・コルトー氏を招いて、演奏会が明の星の講堂で開かれ、二千名の聴衆を感動させた。演奏の後で、コルトー氏は「今夜のメロディーが魂をまず神に近付けるのにすこしでも役立つことを期待します。音楽はなにか神に近いものですから」と語ったそうである。明の星学園も「美は神から与えられたもの、美への憧れは女性にとって大切なもの」として常に芸術を重んじてきた。

青森明の星高等学校に、更に一年教養を身につけるために、一年間の専攻科が設置されたのは1959年のことであった。青森という土地柄、「女に学問はいらない」という風潮が根強かったが、この学園の設立の母体である聖母被昇天修道会の創立者ジャン・ハーバー神父が、男性を育てる女性こそ賢明であり、豊かな教養を身につけてほしいと願った通りにこの専攻科設置は、短期大学の開設へとつながったのである。

1963年「フロレテ・フロレス」(花よ花咲け Florete Flores)のモットーの下に、英語科と音楽

科の二つの科をもつ青森明の星短期大学が開学した。後に幼児教育学科も増設され、三つの科をもつ短期大学として、有能な人材を輩出してきている。なお、英語科は2001年から現代コミュニケーション学科と名称を変えて発展的解消をはかるべく、文部省に認可を申請中である。それについてはまた後に触れる。

青森から浦和へ

青森明の星短期大学開学と同時に、青森明の星短期大学付属音楽教育研究所が開所した。青森での短期大学開学の翌年に、明の星学園では、東京近郊に新しい教育事業を始めることになった。

「恵まれた都会ではなく、地方都市でこそ一流の教育を」という聖母被昇天修道会の目的にそって、東京ではなく埼玉県浦和市が選ばれ、浦和市大牧に土地を求め、まず修道院と幼稚園、続いて浦和明の星女子高校が認可された。

1971年に、英語科と仏語科をもつ浦和の明の星女子短期大学が開学して今日に至っている。なお、浦和の短期大学開学の四年前の1967年から、修道女は戸籍上の氏名を使用することになった。英語科と仏語科から成る短期大学として出発した浦和の明の星短期大学は、1999年から、国際コミュニケーション学科の設置が認可され、国際コミュニケーション学科の英語専攻、仏語専攻という形となった。

明の星学園に学ぶ生徒・学生達のうち、キリスト教の信者の数はごく少数であるが、明の星学園の教育は、幼稚園から高校、専攻科、短期大学すべてを通して、その根本にキリスト教の価値観、人間観、世界観が据えられている。人間一人一人が神から与えられている固有の人格を尊重し、同時に他者をも、自分と同じように大切にするという校風である。キリスト教の信仰をもとうともつまいと、みな神の子供であり、各人は愛によってこの世に生を与えられ、その愛を生きることが、それぞれの人の幸福への道であるという信念である。

その教育方針は、「正・浄・和」という校訓に要約されている。ここに学ぶ一人一人が「正しく、^{きよ}浄く、^{なご}和やかに」生きていくようにとの期待がこめられている。これは、「真福八端」とか、イエスの「山上の説教」とよばれるものの精神をくんでいる。すなわち、「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる」(マタイによる福音書5-6)「心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る」。(マタイ5-8)「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子とよばれる。」(マタイ5-9)から由来している。

明の星のカリキュラム

次に、青森明の星短期大学と、浦和と、それぞれの学科構成、ねらい、カリキュラムを具体的にみていくことにしたい。

青森明の星短期大学は、英語科、音楽科、後に幼児教育学科が増設され、三学科構成の短期

大学であったが、前にも述べたように、英語科〔後に英語学科となる〕は2001年をめざして、現代コミュニケーション学科として新設を文部省に申請し、認可されれば英語学科は、発展的解消を遂げることになるであろう。認可されると次のような構成となる。

現代コミュニケーション学科

- ① 英語コミュニケーションコース
- ② 心理コミュニケーションコース
- ③ 日本語ビジネスコミュニケーションコース

音楽科

- ① 音楽教育コース
- ② 音楽療法コース
- ③ 音楽ビジネスコース

幼児教育学科

- ① 保育コース
- ② 人間関係コース

の三学科である。

青森明の星短期大学の英語学科は、1963年の創設以来、ネイティブ教員による少人数制の教育によって、優秀な人材を世に送り出してきたが、少子化と不況による私立大学離れ、国公立大学志向、特に女子学生の全国的な四年制志向と短大の減少傾向が表れてきて、志願者の減少が目立ってきた。そのため、時代の要請に合わせ、より魅力ある英語教育の在り方を求めて、様々な検討を重ねた結果、従来の英語学科の教育成果を継承しつつ、国際化、情報化の進展が著しい現代社会で、心理的な側面からのコミュニケーション能力を養成すること、同時に母国語である日本語の豊かな表現力を培うコミュニケーション能力、またコンピュータの運用能力を養うことも大切であるという認識から、新しい三つのコミュニケーションコースをもつ「現代コミュニケーション学科」へ変貌をとげようとしている。

音楽が明の星の教育の初期から、非常に大切な意味をもっていたことは前にも述べた通りである。特に創設にあたった五人の修道女の一人であるシスター・ジゼル・ドルインは、四十年間にわたって、ピアノとヴァイオリンを教え、長年にわたる貢献によって、青森県知事から表彰を受けたほどであった。

現代コミュニケーション学科と同様に、音楽科でも、多様化する現代社会の要請にこたえるべく、いろいろな工夫がなされている。音楽教育コースでは、学校や音楽教室で音楽の素晴らしさを伝達できる人材を育成する。音楽療法コースは、ストレスに悩む人々や障害をもっている人々に音楽を通して、心身の機能を向上させ、生活の質を高める音楽療法士の育成をめざしている。卒業後は、障害者の施設や、高齢者の福祉施設での活躍が期待されているというのをみても、現代社会の必要にこたえようとする姿勢が明確である。

音楽ビジネスコースでは、コンピュータを用いて情報処理能力の向上をはかり、音楽に関す

る法律や、マネジメントのあり方を学ぶなど、きわめて現代的な適応をめざしているといえる。

幼児教育学科においても、その根底に、「人間はみな神に愛される存在であり、一人一人が独自の存在である」というキリスト教精神があるのは言うまでもないが、特に幼児教育は、人格の基礎形成をなす大切なものであるという深い認識に立って、創造的な保育者の養成をめざしている。芸術教育を重んじてきたこの学園らしく、卒業発表の一環として、学内の明の星ホールで「表現研究発表会」が開催されて、オペレッタ、ストーリーテリング、合唱、合奏、造形作品の展示など、青森市内の保育園と幼稚園の子どもたちが招待され、広く市民にも公開されている。

英語科と仏語科を設置して1971年に開学した浦和の明の星女子短期大学は、今では、国際コミュニケーション学科での英語専攻、フランス語専攻という形になっている。1985年には、次第に増えてきた英語科の定員を百名から百六十名に、仏語科の定員を六十名から八十名にふやした。ますます進んでいく国際化社会、情報化社会の中で、国際的な場でも通用する「実際に役に立つ英語・フランス語」の実力を養い、豊かなコミュニケーションを可能とする女性の育成を目指している。

四年制への転換を目指さず、短期大学の特色を生かして、短期大学に徹する方針であると見受けられる明の星では、卒業後の進路に直結した、「就職指導プログラム」「進学指導プログラム」「留学指導プログラム」を用意して、チューター制度をとって、学生一人一人の興味と適性、習熟度に応じた指導をしているのが大きな特色である。学生一人一人に専任教員がチューター（個別指導員）としてつき、授業以外にもコミュニケーションの機会をもって、進路の相談にのっている。

英語専攻のカリキュラム一覧表をみると、どういう進路をとるにせよ、必修として履修すべき英語科目が総合英語演習ⅠとⅡ、英会話ⅠとⅡ、英語講読ⅠとⅡで計六科目。あとの二十の英語科目は、選択必修としてそれぞれの進路に応じて履修するようになっている。

フランス語専攻カリキュラムでは、必修フランス語科目がフランス語ⅠとⅡ、基礎演習ⅠとⅡの四科目しかなく、あとの十六のフランス語関係科目は、選択必修として履修するよう配されている。

英語専攻では、コンピュータとインターネットを駆使した外国語教育が重視され、フランス語専攻では、フランスという国の文化、風土、歴史を知ることが奨励されていることが大きな特徴である。

2000年3月3日発行の青森明の星短期大学の学園報の一面に、1999年に中華人民共和国吉林省長春市にある、吉林国際言語文化学院と姉妹校の提携を結ぶ協定書に調印したことが、学長の辻昭子氏によって報じられている。「二十一世紀に向けて」と題する、学長の巻頭言である。この提携が民族、宗教、文化の違いを乗り越えて、多様なものが共存する社会を築く若者を、中国と日本の双方から生み出すことになれば、幸いだ。来るべき二十一世紀を展望して、辻学長は、フランスの人類学者レヴィ・ストロースの「ここ二世紀、科学と技術はたゆみなく進歩し、より大きな能力と幸福を人間に与えるであろうと信じて来たが、今世紀に入って世界に起こったさまざまな出来事は、これを見事に裏切るものであり、人類は第三のヒューマニ

ズムを求めて歩まなければならない」、という言葉を用い、二十一世紀に求められる第三のヒューマンイズムとは、「共生」による人間性復活であると提唱している。つまり「国家、人種、民族、文化、宗教の相互の違いを認め、受け入れ、尊重して互いを必要としつつ共に生きることです。」と。

明の星学園五十年史の、からし種が大きな枝を張るほどの木になったという文章を前に引用したが、「そしてこの50年の間に『未来の為に良い基礎となる宝を蓄え、』一日一日と輝きを増してきた伝統の光りは、周囲を明るく照らしながら、しっかりと次の時代へ受け継がれてゆきます。この光は今度は未来を照らすことになるのです。」と続いているのを想起せずにはられない。

木は実によりて知る

一つの学校の評価はいろいろな角度からすることができる。創立者の理想や理念、その学校の歴史、カリキュラムや教育方法を知ること。また、その学校がどんな卒業生を生み出し、どんな分野でどのような活躍をしているかを知るのも、評価の重要な指標となるであろう。

明の星学園の教育が生み出した一つの見事な成果として、明の星学園の前身である青森技芸学院の第一回卒業生である佐藤初女さん^{はつめ}という方を紹介したい。佐藤さんは、卒業後、同窓会の幹事を長くつとめ、「明の星五十年史」でも、同窓会の会長として祝辞をのべている。佐藤初女さんの見事さは、同窓会の会長としてだけではない。

しかし、その祝辞「大きな幸せに包まれて」の中の、「私も明の星で神にであい、この出会いなくして今日の私はあり得ないと思うのですが、明の星を通じて神に出会った卒業生が沢山いらっしやることを考えますと、ミッションスクールの果たす使命は偉大であり、その道にたずさわった創立者に感謝の心でいっぱいでございます。この出会いのよろこびと、50周年を迎える感激はとても言葉には表せませんが、今から生活の上で実践してまいりたいと希っております⁷⁾。」とのべている。これは、佐藤さんの心の底からの真情であろう。ミッションスクールの果たす使命の大きさをよく伝えている。そして、佐藤さんの真価は、「生活の上で実践して」きたことにある。

2000年6月11日のカトリック新聞に、「鐘が結んだ感動の出会い」という記事がのった。青森県弘前市の郊外、岩木山のふもとにある「森のイスキア」に、アメリカのコネティカット州のベツレヘムという小さな町にある、女子ベネディクト会の観想修道院の名誉院長マザー・ベネディクトがわざわざ訪ねて来たのである。マザーは九十才、佐藤初女さんは七十八才。初女さんは、三十年以上にわたって、自宅を開放して、悩み苦しむ人々をいつでも受け入れて来た。マザーは、自ら創立した観想修道院に、新しい時代に合ったやり方で、外部の人の受け入れ制度を作って、実施した人。そのレジナ・ラウデス修道院から、1994年に鐘が送られたのであった。

初女さん自身、幼い日に教会の鐘の音に誘われて、信仰への道を歩みはじめたのである。悩みを抱えた人、心を病んだ人、人生の重荷にあえぐ人、誰でもを受け入れて、ゆっくりとひた

すら話を聴く。そして、心のこもった手料理でその人々をもてなす場所、「森のイスキア」と名づけられたその家に、初女さんは、鐘の音を響かせたかった。橋渡しする二人の友人が介在して、レジナ・ラウデス修道院の鐘が贈られ、送られてきたのであった。

鐘の贈り主であるマザー・ベネディクトが、鐘の音の受け手である佐藤初女さんに、どうしても、すぐに会わなければと思いついたのは、人と自然との共存をテーマにして、ジャック・マイヨール、フランク・ドレイク、14世ダライ・ラマと共に佐藤初女さんが出演した、龍村仁監督によるドキュメンタリー映画「地球交響曲 第二番」の海外版のビデオを見た時であった。人生に疲れ、悩み苦しむ人々をひととき、「森のイスキア」という家に受け入れて、その土地に産した、大地の恵み、旬の食べ物を、素材のいのちを生かすように、佐藤さんが丁寧に心をこめて調理してもてなしているのを観たマザーは、自分が観想修道院で、自給自足の農耕生活を営みながら、専門の分野をもった人の入会も積極的に受け入れ、学生や外部の人を滞在させる宿泊施設をも備えて、外の世界とのつながりを続けて来た自分の活動と佐藤さんのそれとに、「すべての人にキリストの姿を見出して受け入れる」真のホスピタリティという精神において、全く共通しているものがあると直感したからであろう。

「地球交響曲 第二番」は1995年の「日本カトリック映画賞」を受賞したのだが、この映画を、熊井啓監督の「深い河」よりも高く評価して、推したのは、カトリック司祭の暗作久昌英氏であった。暗作久氏は「イエスを囲んで疲れた人々が集まったら、おいしいパンがあふれ、皆共に食事して仲間になったという、教会の原点をおもわせる」といい、「この映画が単に映画として優れているだけでなく、この時代にあって人々の覚醒を促す重要な作品に思えた⁸⁾」のだと語っている。人類のエゴイズムが、生命体としての地球を危機に追いやりつつある現在、心と心の出会いを求め、あらゆる生命との共生を求めて実践している佐藤初女さんの生き方に、暗作久氏は、深い感動を覚えたのである。

佐藤初女さんは、自らの半生を、「おむすびの祈り〈いのち〉とく癒し〉の歳時記」(PHP研究所)という本の中で、飾らない、率直な筆致で語っている。イスキアというのは、イタリアの南西にある火山島の名前である。「森のイスキア」もその前身である弘前イスキアも、この島から名前をもらった。

ナポリに財産も、地位も教養にも恵まれた青年がいた。大富豪の息子である彼は、愛する美しい娘の愛をも手に入れた。その瞬間、彼はどうしようもない倦怠と虚脱感と無気力とに襲われた。その時、父親から少年時代に連れて行ってもらったイスキア島を思い出した。

今は誰一人住む者もなく廃虚となった島の真中に教会があった。青年はその一角の司祭館に住み、イスキア島を取りまく地中海の美しさ、闇と静寂と、そこを照らす月の光を浴びて、新しい生きる力を得たという。

このエピソードを知って、初女さんは、人生の重荷で崩折れそうになった人々が、そこで癒され、新しい生へのエネルギーを得てくれればとの祈りをこめて、「森のイスキア」と名付けたのである。

初女さんは、過去の経歴とか、社会的地位とかに一切とらわれることなく、どんな人でも

「森のイスキア」に受け入れて、手料理でもてなし、その人の話を、ひたすら、ゆっくりと聴く。諭したり、教えたりはしない。食事と生き方の間に、ある神秘的なつながりがあることも感じている。食べることは、その食材のもっているいのちをとり入れることであり、心のふさがっている間は、食べ物、その人の中に入っていくかないのである。

初女さんが、本格的にこうした奉仕活動に専心するようになったのは、夫を看取った後であるが、この活動の原点に、母校明の星学園との出会いがあり、そこでカトリックの信仰を得て、その信仰によって生きる道を支えられてきたのだと語っている。「卒業後も、自分一人ではどうにもならない苦しみや悩みを抱えたとき、また人生の節目節目には、母校のシスターのもとへ相談にあがっていました。創立者である恩師の、『今この時を大切に真実に生きなさい。そうすれば与えられる』という言葉は、今でもかけがえのない贈り物として、私の生きる指針となっています⁹⁾。』

学園の創立者と卒業生が、このような絆で固く結ばれているというのは実に仕合わせなことではないか。その創立者といわれたシスター・ジゼル・ドルインは、1979年に佐藤初女さんが染色工房を開いた時にお祝いの言葉を寄せている。「私が佐藤さんのお人柄の中に一番強く感ずることは、単純、率直、心の正しさでございます。そして、何事にも全身全霊を傾けて熱心に献身する方だということですよ¹⁰⁾。』

もう一つ、佐藤初女さんの信仰の支えとなり、奉仕活動の源泉となっているのは、初女さんの所属する弘前教会の主任司祭であった、ヴァレー神父の「奉仕のない人生は意味がない。奉仕には犠牲が伴う。犠牲の伴わない奉仕は真の奉仕ではない¹¹⁾」という説教であった。ヴァレー神父はやはり、フランス系カナダ人で、叙階後、大学で社会福祉を専攻し、宣教と社会福祉の夢を抱いて来日、二十六年間にわたって青森県の各教会で司牧にあたった司祭である。

青森県弘前市に、知的障害児の通園施設や、特別養護ホームを創設した方だが、佐藤初女さんは、「言葉でもなく、知識でもなく、どんなことも、どんな人も大切に、温かい心を通わせ続けた、神父様の福音の実践¹²⁾」に深い感動を覚えた。ヴァレー神父の生き方は、「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ病気のときに見舞い、牢にいた時に訪ねてくれたからだ」(マタイ25章35-36)の聖書の言葉の実践そのものだと思えたのである。

教会の鐘の音に深く心を動かされて、幼い日からキリスト教の洗礼を受けたいと、強く望んでいたが、佐藤初女さんが実際に洗礼を受けたのは、1954年のことであった。洗礼名はフランスのリジュの聖テレジアを迷うことなく選んだ。聖テレジアは、別名「小さき花のテレジア」ともよばれる。十五才でカルメル修道会に入会し、二十四才で病気で世を去るまで、単純だが、無条件の篤い神への信仰心のゆえに、後に列聖された¹³⁾。

初女さんは十七才の時、胸を患って、静養室で寝ていた時に看護にあたった修道女(おそらく、看護婦であったシスター・ローズであろう)から「小さき花のテレジア」の本をそっと贈られ、受洗の際には、聖テレジアを洗礼名にと願っていたという。その当時、学校内では、キリスト教についての勉強は一切禁じられていた。創立者の一人、シスター・ジゼル・ドルイン

は、求道者としての佐藤さんを次のように語っている。「当時は学校内で宗教についての話は一切禁じられておりました。第二次大戦の気運が濃かった時代でしたから、やむをえなかったのでしょう。けれども純粹な佐藤さんは真理を求めることにも熱心で、学校ではできない宗教の話を、隣接してあった私どもの修道院「聖光寮」に通って勉強しました。当時、この「聖光寮」にまで通って教えるの道に心を開いたのは、佐藤さんが一番最初だったと思います¹⁴⁾。」

佐藤初女さんが受けたのは難しい神学の講義でも、公教要理という信仰入門のための教理問答でもなく、聖書の系統的な勉強でもなかった。求める心を内に深くもっていた初女さんが、宣教の熱意に燃えていたが、理論だけで人を動かそうとはしなかった修道女達とのふれ合いから、キリスト教のエッセンスを体得していったのである。「一人一人の中にキリストを見る」「生活すること、その瞬間瞬間が祈りである」「他人を生かすことによって自分も生かされる」「友のためにいのちを捨てることほど、尊いものはない」初女さんを支えているこれらの言葉は、すべて母校明の星の教育によって、種が蒔かれ、その後の様々な出会いや経験によって、大きく成長していった。

初女さんの始めた「森のイスキア」が、初女さんが続けられなくなったらどうなるかも、彼女は全然心配していない。マザー・テレサが、あなたがいなくなったら、誰があなたの仕事を引き継ぐのですかときかれた時に、「私は将来のことを全く心配していない。自分のやったことを引き継いでくれる精神が存在すれば、必ず何らかの形で続いていくでしょうし、それを支える精神がなくなれば終わるでしょう。それでいいのです。」と答えていたのと全く同じ心の持ち方である。

小さなからし種から育った青森と浦和の明の星短期大学の将来も同じことであろうと思う。責任者として、それぞれの短期大学の学長が、後継者のこと、学校の将来のことに様々に思いをめぐらされることはあるだろう。修道者たちの高齢化、召命の減少、人口の99%以上が非キリスト者である日本におけるミッションスクールの将来、大学教育を受ける18才人口の減少にいかに対処していくかという、日本の大学全体の抱えている難問題もある。しかし、それを支える精神が確固として存在する限り、からし種から大きな木に育った明の星は、必ず二十一世紀にも育ち続けていくであろうと信じている。

おわりに

私がお訪ねした時に、忙しい時間を割いて、丁寧に答えてくださった上、様々な資料を下された青森明の星短期大学の辻昭子学長と、浦和の明の星短期大学の小野寺和子理事長に厚く御礼を申し上げる。近い将来にカナダのニコレットに、アンリエット・カンティン先生をお訪ねして、聖母被昇天修道会の創立者ジャン・ハーパー神父について、御教示いただくと共に、カンティン先生の完成なされたハーパー神父の伝記を、日本に紹介することができることを強く望んでいる。

注

- 1) 修道会とは、福音の勧告に従って、清貧、貞潔、従順の公式請願を立て、共同生活によりキリスト教の徳を実行する修道者の集まりをいう。観想、教育、学問、司牧と布教、病者看護、病院経営など、会によって目的をもっている。
- 2) 十九世紀末以来、カナダから日本への伝道活動は、日本の社会と文化の様々な面に影響を与えているが、プロテスタント、カトリック教育野の諸活動のなかで、特に、女子教育の促進に大きな貢献をしている。
- 3) 同じ戒律を守る修道院のグループをさす。
- 4) 三十六年間の明の星学園理事長職を終えて、1994年にカナダのケベック州ニコレットに帰国したシスター・アンリエット・カンティンがこのたび、ジャン・ハーパー神父の伝記をフランス語で、完結されたという。なおシスター・カンティンは、1986年に教育功労者として、国から勲四等宝冠章を授与された。
- 5) 413年のエフェソス公会議で、マリアはキリストの母であるばかりでなく、神の母である事が決定されてから、マリアへの崇敬はひろまった。次第にマリアも神に近いものにまで高められ、教義として、マリアが死後、天に昇って、神の近くに座を占めるという被昇天という考えと、マリアが母の胎内に宿った時に、原罪を免れていたとする無原罪のおんやどりという二つの考えとなった。被昇天は5世紀に東方教会で8月15日とされた。
- 6) 12世紀後半に、マリアを49の異名でよぶロレットの連祷なるものができた。「天使たちの女王、智慧の玉座、象牙の塔、暁の星〈明の星〉、海の星…」などである。
- 7) 「明の星学園50周年祝辞集」43ページ。
- 8) 佐藤初女 「おむすびの祈り <いのち>と<癒し>の歳時記」(PHP研究所)208-209ページ。
- 9) 佐藤初女 前掲書 135ページ。
- 10) 佐藤初女 前掲書 146ページ。
- 11) 佐藤初女 前掲書 107ページ。
- 12) 佐藤初女 前掲書 109ページ。
- 13) その人の聖性、殉教、あるいは英雄的な徳行を正式にカトリック教会が承認して、その人を聖人録に記入すること。リジェの聖テレジアは、1977年、ローマ教皇から「教会博士」の称号を授与された。
- 14) 佐藤初女 前掲書 146ページ。